

301478-001-3

特71-935

女の腕

石倉重継

M38.8

DBK-0001



4等71
935

脚 本 女 の 腕



(青木香葩君画)



予嘗て宇都宮社長の
 俳翁石本一雅、石山猛夫、
 島市、大川橋造子、
 大川座、興行せしむる
 作諸小島竹堂所介して
 頼り、初目見えの演劇を劇場
 これが脚本の新作を、
 再應これに辭退せしが、竹堂子の懇望もだし難く、

38 8 14
 内交

野新聞に記者たりし時、新
 近藤慶次郎等の諸子、福
 且は斯道は人に劣らぬ好き者として、即ち快くこれを
 諾し、全市の古蹟をし鳥塚の故事に縁み、外題を
 『鴛鴦塚』と名付け、七幕十三場の脚本を作り、去明
 治三十三年十一月二十三日初めてこれを場の上せし
 が、作の拙劣なるにもかかはらず、俳優諸子の熱心
 と、座主大川橋造子の經營とに依り、意外なる喝采
 を博し、全市は云ふに及ばず、鹿沼、今市、日光、
 大田原、黒磯、栃木等の遠近より、總見物のつけ込
 みを受け、全市稀有の大入を占め得たり、斯道の好
 き者いかでこれに自惚れざるべき、忽ちにして作者
 氣取りとなり、爾後二三の狂言を新作して場の上せ

しが、たまく〜今回の日露開戦の報に接し、我が忠
 勇なる軍人諸氏の壯烈なる戦功談を材として、一篇
 の脚本を作らんと欲せしが、職に忙殺され遂に素志
 を果たさずありしに、たまく〜彼短編小説家として、
 世界に有名なる佛のモオパッサン氏の作、義勇軍(文
 學士橋本青雨氏譯、太陽所載)を読み、これに依て
 一の脚本を翻案し、題して『戦争脚本女の腕』と名
 付け、これをわが博文館發行の日露戦争實記誌上に
 掲げたり、素より予の如き作、到底斯道専門家の一
 際に供するの價値なからんも、一度びこれを場に上
 ぼせ、いさゝかたりとも我戰捷國民諸氏の一笑を買
 うを得ば、予の満足これに過ぎずと、こと更に一書
 として世に出すこととせり、嗚呼さるにても自惚れ
 の強き男にては候はずや。

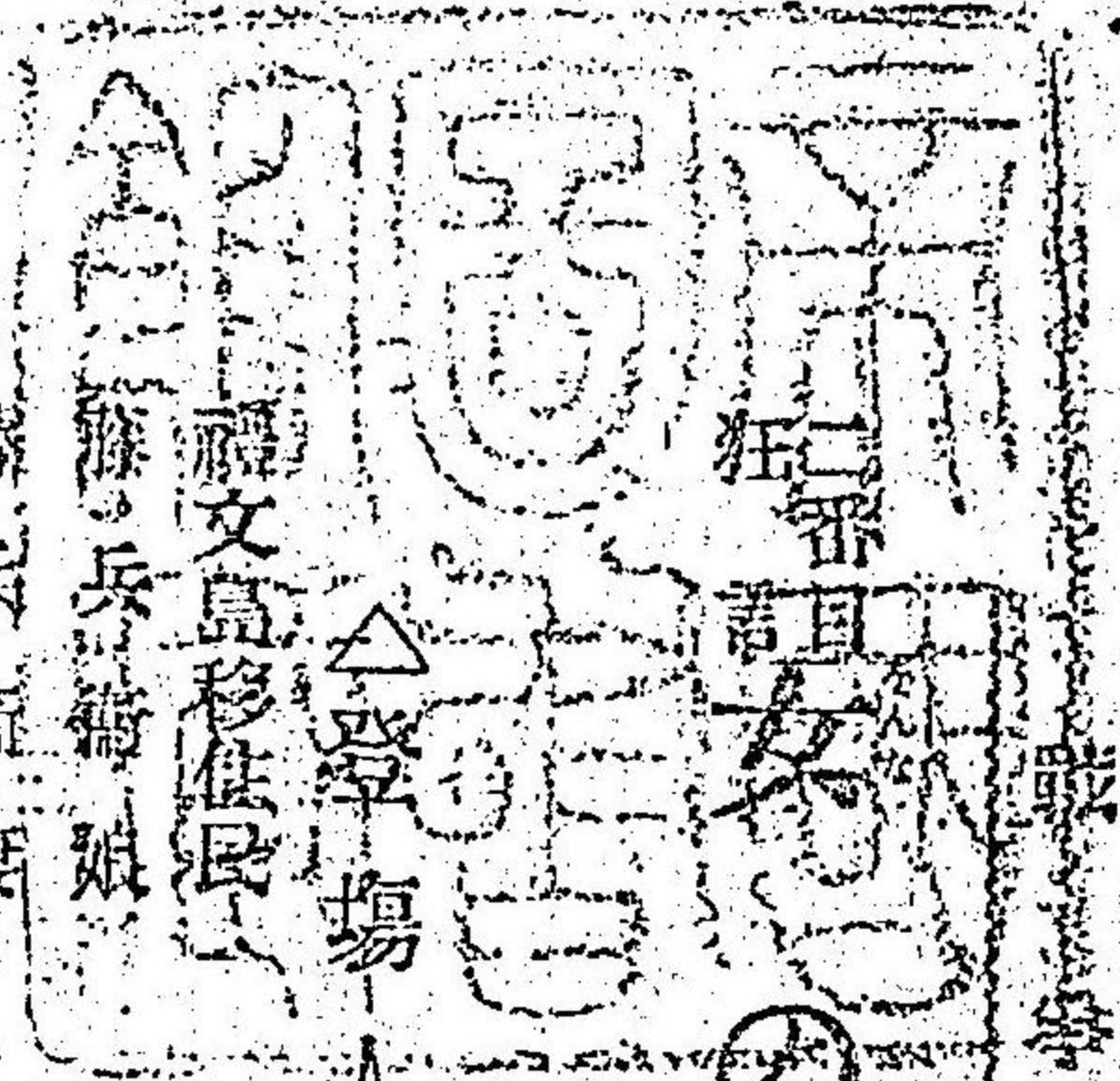
不忍池畔にて

明治三十八年
八月一日

石倉翠葉

識

特刊
935



戦争脚本

女の腕

石倉翠葉作

△登場人物

露國海軍大尉	子ボル	古川藤兵衛
同 海軍少尉	シオルギ	同 艶子
同 水兵	甲、乙、丙、三名	同 おはる
禮文島村役人	村越銀造	同 大勢
同 漁師	平八	同 吉藏
島民	大勢	同 吉藏

本舞臺上手寄瓦葺中二階、屋根の雨樋を少しく見
 せ、左土間より中二階に階子段あり、階子段の下
 側、即ち中二階の下は白壁塗り頑文造りの土室
 鐵の扉あり、正面切り窓三ヶ所計り見せ、階子段

(一)

吉藏 知れた事だ、此艘で手前を擲つて呉れるのよ。
ト、艦を持つて打つて掛る。平八愕きながら、
平八 此奴あ面白い、擲れるなら擲つて見ろ、懲う見
えても俺はナ、此禮文島では、音に聞えた、腕ッ
筋の強いお阿兄さんだ。

吉藏 何の糞ッ。

ト吉藏艦を持つて又も打つて掛る、平八驚いて本
舞臺下手に逃げ込む、吉藏續いて追ひかける、
艶子此騒ぎを聞き付け、母おはるに何やら私語
き、座を起ちて衣紋を直し、階子段を降り、庭
下駄を履いて柴折戸より窺ふ、吉藏、平八尙も
争ふ、艶子莞爾りと笑みを含み、二人の間に飛
で出で、

艶子 まあ誰かと思つたら吉藏さんに平八さん、何う
云ふ譯か存じませんけれど、若しかお怪我でもな
すつたら何うなさるので御座います、第一御上に
濟ま無いちや御座いませんか。

ト屹と云ふ、兩人面目無げの體、艶子尙も、
艶子 お兩人は未だ、今朝の騒動を御存じ無いのです
ね。

吉藏 夫れ見たかと思はぬ計りに、揉手しながら

艶子 向ひ、

吉藏 お嬢さん、そ、其處です、今も私が此野郎に、
村の大事を聴かせ様とすると、野郎奴無暗に剛情
張りやがつて、仕舞にやあ露西亞人だなんて吐か
すんです。

平八 聴いて飛でも無いと云はぬ計りに、おすお
す艶子の傍らに寄り添ひ、

平八 いやお嬢さん、左様云ふ譯ぢや無えんです、此
野郎が譯も咄さねえ内から、奴は日本人かッて吐
かしやがるから、呆放なことをこきやがると、つい
癪にさはつたので、一寸ら翔つて見たんです。

艶子 誰いて、

艶子 まあ、お兩人のお腹立も御尤で御座いますか
元はと云へば敵懐心とやら、皆なお國を思ふから
始まつたこと、こゝは妾に委して下すつて、水に
流して下さいました。

兩人 ど、何う致しまして。

ト、異口同音、艶子一寸思ひ入れあつて、
艶子 實は今吉藏さんの仰有る通り、村では大變な騒
動が起つたので御座いますよ。
吉藏 聞いて驚愕する。艶子ついていて。

艶子「ト云ふのは御存じの、あの浦鹽の軍艦が、又々此村を脅迫しに来て、大砲を放したのです、すると村中の人も大變驚いて、大騒ぎをして村越さん(村役人)だの、内の父さんなどが集まつて、義勇軍といふのを編成へて、今にも露兵が上陸したら死ぬ迄戦つて酷い目に合はしてやると、怒う相談を定めたので御座います、夫れや是やで父さんも今朝から未だお歸宅が無い位なので、夫に遂先刻の情報では、軍艦一艘が四五海里沖に、碇を卸したと云ふ事で、屹度今晚あたりは、そつと上陸して飲料水を汲みに来るだらうと、皆さんも大層警戒をして入らつしやるのです。」

平八「へー、那麼騒動があつたのですかえ、夫とは知らず朝ツから、大酒に喰ひ酔つて、……、こりやあ村の衆に合はす顔が無え。」
ト首を垂れて溜息を吐く、吉藏小氣味好げに笑ひ、

吉藏「それ見ろ、だから俺が云はねえ事ちや無え。」
艶子「押し止めて、
艶子「まあ左様云つた譯なのですから、お兩人共其お

積りで、早く今から村越さんのお宅へ行ていざと成つたら御國の爲に、充分働いて下さいますし、妾とても女でこそあれ……。」
ト云ふ時奥の方にて微かに鯨波の聲を聞かす、三人これを聞いて屹と成る、母おはる起たり座つたりして迂路々々する、無て艶子二人に向ひ、

艶子「アレ皆さんが鯨波の聲を上げて入らつしやいますから、貴郎方も早く行つしつて下さいまし、なアに妾だつていざと成つたら、露助の五人や六人位取控へて御目にかけますよ、ホ、ホ。」
ト笑ふ、二人威服の思ひ入れ宜しくあつて、

吉藏「流石は藤兵衛さんのお娘だ、代々御國の爲に成らつしやつた、偉らい經歷のある御家柄だから、お嬢さんの様な男優りの偉らいお方が出来さつしやるも、こりやあ無理の無えことだ。」

平八「左様だともよく、夫に引き代へ此方達は、未だ御上のお役に立つた事が無えんだから、此時を幸に、ウンと働いてお上の御役に立なくツちやならねえ。」

吉藏「左様だ〜。」
ト袖打つて艶子に辭義をしながら下手揚幕に

引込む。艶子背延して兩人を見送り、

艶子「ほんに罪の無い人達だこと。」
ト獨語き、扉の錠をゆめ、階子段を昇り母の前

に座る、母眼鏡を外し、
お春「今聞いて居れば、何か吉藏さんと平八さんが、
争論でもなすつた様子。」

艶子「ハイ、別して取止めた事では御座りませんので
す、ほんに彼人達も、あれで學問でも有つたなら
随分とお國のお爲めにも成る人ですのに。」

ト云ふ時、奥座敷にてボン／＼時計八時をうつ。
母お春氣が付いて、

お春「オヤ、知ら無い間にもう八時に成つた、何で今
晩は父さんの御歸りも遅からうし、留守居と云つ
てはたつたお前と兩人限りだから、奥に行つて御
飯でも食べて、お炬燵の仕度でも爲て置きませう、
シタガ、全體父さんも、餘り氣が張り過ぎて入つ
しやるから仕様が無い、日露戦争が始つて此方と
いふもの、あゝして仕事も其方除にして、始終村
越さんへ詰切りなのだからね。」

ト云つて俯向き思案の體、艶子ラムプを持ち來
り、火を點けながら、

艶子「夫りやあ母さんが御案じなさるのも御尤で御
座いますが、又父さんのお騒ぎに成るのも、御無
理はあるまいと妾は存じますの、何故と云つて御
存じの通り、祖父さんは御維新の時に討死なさる
し、お兄さんは日清戦争で御戦死なさる、潔さん
(許嫁)は旅順口閉塞の時に、行方知れずにお成りの
ですもの、人一倍お騒ぎになるのも、御無理がな
いちや御座りませんか、それにあゝして御年寄で
一生懸命御苦勞なさいますのも、皆な御國の爲を
思つて遊ばすので御座いますから。」

母お春諾いて、
お春「それはお前のお云ひの通りだけれど、此頃はお
前九で狂人の様にお成りなのだもの。」

ト云ふ時、遙かに犬の遠吠を利かす、母は驚い
て、

お春「オヤ、大層犬が鳴いて居るが、若しや噂の露西
亞兵が上陸したのぢやあるまいね、内はお前と兩
人きりだし、女丈けでは何うすることも出来やあ
しない。」

ト母お春顛へ出す、艶子見て笑ひながら、
艶子「ホ、ホ、阿母さんたら何で御座いますね、

たか、露西亞兵や御座いませんか、内にでも来やうものなら、妾わけなく殺しつちまひますワ。』
お春、滅相なお前、怪我でもしたら何うするのです、まあ那麽ことを云はず、早く奥へ行つて御飯にしませう。』

ト母お春艶子を促して座敷正面の襖を明けて奥に入る、時に舞臺一面薄暗くして、本鐘を利かせ、雪おろしドロ／＼の鳴物にて、向ふ揚幕より露國海軍大尉キポール、全少尉ジョルギヤ、全水兵三人秘密咄しながら出で来り、花道七三に掛る、露兵何れも年の頃三十五六、露國海軍服を着け、劍銃を持つ、大尉キポール、本舞臺下手柴折戸を透し見て、少尉ジョルギヤに向ひ、
露大尉「彼處に日本家ある、貴郎行く宜しい。」
少尉敬禮して本舞臺に掛り、柴折戸の扉を叩く、返事無し、少尉前より烈しく扉を叩き、

露少尉「モン／＼、こゝ開ける。」

返事無し、少尉怒て、大きな聲にて、

露少尉「モシ／＼、こゝ開ける、開けぬと扉を撲破す、

宜しいありませんか。」

ト怒鳴る、暫らく経て艶子出で来り、

艶子「ハイ、誰方で御座いますか、今時分騒々敷いちや御座いませんか。」

ト應答へながら階子段を降り、庭石傳ひ、柴折戸に身を寄せ、扉の隙間より外面を透し見る、

少尉急き込みながら、

露少尉「早く／＼、こゝ開けぬと、あなた方此銃で殺すあります。」

艶子初めて露西亞兵なるを知り、一寸思ひ入れ

あつて、

艶子「ハイ、只今開けますから、一寸待て、下さいまし。」

ト云つて、中二階に走り行き、静かに奥の間より拳銃を持ち来り、後ろに押隠して、柴折戸に寄り添ひ、

艶子「只今開けて上げますけれど、全體貴郎方は何の御用で入らしたので御座います。」

露少尉引き取つて、

露少尉「私達、大變腹減る、飯喰はして呉れる、私達大變疲勞てあります。」

艶子「左様で御座いますか。」

ト云つて、屹となり、銃を外して扉を開く、雪

露少尉「さあ、お這入んなさいまし。」
ト丁軍に挨拶する、露少尉諾いて、大尉チポール、水兵一同を招く、何れも疲勞して困憊して居る體、夫にも似ず、大尉チポールつとめて虚勢を張り、大手を振つて一同を引具し中に入り、挨拶も無くズン／＼庭石傳ひ土間に這入る、艶子身を退いてソツと露兵を尻目に向け、扉を締め後より續いて土間に入り、好き場所を見計らひ梯子の傍に立て掛けある椽臺二脚を取り出して据ゑ、

露子「さア、之へお掛けなさいまし。」

露少尉「貴官掛けるよろしい、遠慮する事無い、日本女親切ある。」

大尉チポール「諾きながら妙な顔にて、私腹減る、飯早く頼む。」

此間水兵三人、椽臺に腰掛け手を組みながら居眠りをして鉢合せする、大尉之を見て、劔にて一人の水兵をとやす、一同驚いて俄かに起ち上り、兩手を正しく下げ、氣を付けの姿勢、大尉

露大尉「貴様方何して居る？」
水兵甲「私腹減つて耐りません。」

同乙「私も腹減る、眠くあります。」
同丙「私も……。」

艶子「噴飯して、しらへて上げますから。」

捨臺白にて二階に上り、座敷正面の襖を開ける、母お春先刻より怖は／＼ながら襖を細目に開けて覗いて居り、娘艶子と鉢合せして、驚いてキヤツと叫ぶ、艶子も喫驚して、
露子「まア阿母さんで御座いますか、何なすつたのです。」

ト聲をかけながら襖を閉める、露兵も此聲を聞き、一寸驚いた風、聽て少尉ジョルギー、何か思案の體にて大尉チポールに向ひ、
露少尉「貴官、ボート日本人見付る、流すあります、軍艦歸れぬ何うするありますか。」
露大尉「心配すること無い、軍艦見張りして居る。」
露少尉「不可ません。」

露大尉「可ません、よろしい、泳いで行きます。」

露少尉「左様する、私達凍えて死ぬあります。」
大尉「子ポール當惑の體、少尉水兵皆無言で腕を組む、艶子咳拂ひして襖を開け、大きな膳に蒸したる馬鈴薯を澤山積み重ね、露兵の中央に置く、續いて母お春探へながら汁鍋を持ち來り梯子段の上に置きて逃げ込む、艶子笑を忍び汁鍋を取りて膳の側に置く、大尉身分を忘れ、饑餓想な容子にて膳と鍋を見較べる、水兵も背伸して打目成り口を拭く。

艶子「何うもお待ち遠で御座いました、さあ御遠慮なく召し上げ。」

大尉始め一同喜んでガツ／＼食ひ始める、艶子好き程に座を占め、笑ひながら之を見て居る、大尉仕舞には夢中となり、手攫みにて馬鈴薯を食ひながら、少尉に向ひ、

露大尉「シオルギー少尉、君酒欲しくありませんか、私大變飲み度くあります、日本美人、貴郎聞いて見ると宜しい。」

少尉「畏つて艶子に向ひ、
露少尉「貴嬢濟みません、日本酒呉れる、宜しい。」

艶子「酒落臭いと云ふ思ひ入れよろしく
露大尉「ハイ、少々なら御座います。」

艶子「濟みません。」
と涙りに禮を云ふ。

艶子「ちやア待て居て下さいまし。」
ト艶子起て階子段の下をくぐり、土室の鏡の扉を押して開けて中に入り、酒樽と茶碗を持ち出て來り、大尉子ポールの前に置く、子ポール喜むで樽を開け様とする、開け方を知らず大いにまごつく、艶子笑ひながら樽の栓を抜いて遣る子ポール舌鼓打つて呑み、少尉始め部下の水兵にさして遣る、一同酔つて來て上機嫌となり、一人の水兵可笑しき身振りにて何やら微吟しながら踊り出す、艶子頓合を計つて、

艶子「もう今晚は遅いんですから、皆さんは其處でお火でも焚いて御寢みなさいまし、妾も奥に行つて臥りますから。」

ト云つて例の階子段を上り奥に入る、露兵心地好げに何時かトロ／＼と眠る、暫時経ちて、艶子派手やかなる寢姿にて、下手植込みの樹の間より姿を現出し、雪明りに花道の方を透か

して見、拳銃三發續け様に放ち、直ぐ姿を隠す
露兵驚いて眼を覺し、各自起ち上り、銃に劍を
付ける、艶子周章しく正面襖を開て出で來り、
艶子「大變です、日本兵が大勢押し寄して來まし
た、早く何かして下さいませんと、妾の家は焼か
れて仕舞ます。」

露兵これを開いて迂路くする、艶子又も急ぎ
込みて、
艶子「ですから早く彼土室に隠れて下さいませぬ。」

露兵「隠れませぬ、土室何處ありますか。」
艶子「ソレ其處です、早くして下さらんと、貴郎方の
生命が御座いませぬよ。」

ト云つて土室の扉を開けて露兵を後ろから押込
む、露兵も面喰つた形にて夢中にて吾先に逃げ
込む、艶子仕済したる體にて、銃の扉を閉ち堅
く錠をおろし、完爾りと微笑みながら、

艶子「聲を立てちやあ不可ませぬよ。」
ト云つて、暫く様子を窺ふ、土室の中にてはコ
トリとの音もさせぬ、艶子安心の體にて胸撫で
下し、小さな聲にて、

艶子「本當に女だと侮つて、圓々しいッたら有りやし
ない。」
ト云ひながら、拔足にて柴折戸の方にゆき、戸
を開けて外面を覗き、

艶子「父さんは何うなすつたのだらう、早くお歸りに
成れば好いのに。」
ト云ふ時、艶子の父藤兵衛、年の頭六十餘り、
何處と無く威權あり、地味なる綿入に綿入羽織
ラッコの帽子を冠り、裾端折りにて草鞋かけ、
向揚幕よりバタ／＼にて出來り、艶子を見て、

藤兵衛「オッ、艶子か、た、大變な事に成つた。」
ト急込みて云ふ、艶子冠して、
艶子「吐ッ。」

と父を口止めして一層小聲にて、
艶子「阿父さん御心配なさいませぬ、露西亞兵は彼の
土室の中に入れて置きました。」
父聞いて驚きたる體、

藤兵衛「ナ、何に土室の中に……ア、露西亞兵か？」
艶子「ハイ、あの拳銃で驚かして、とう／＼土室の中
に押込んでやつたので御座います、もう此方は大
丈夫で御座いますから、御苦勞様でも早く村越さ

んのお宅に行つて、大勢を御連れなすつて来て下さいませ。

父藤兵衛之を聞き嬉しき思ひ入れにて、

藤兵衛「好いとも〜」

ト諾き、急ぎ引返して向揚幕に引込む、露兵始めて計器にかゝりしと悟り、扉をドン〜と叩

露兵「モシ〜こゝ開ける、早く開けるよろしい。」

ト怒鳴る、艶子笑みを含み、日本下士官の假聲を使ひ、

艶子「何の用ぢや。」

露兵「こゝ開ける宜しい。」

艶子「開ける事は出来ん。」

露兵「何にッ？ 開けません、宜しい、扉を撲破すあります。」

艶子「ホ、ホ、大變に強いことを仰有るのね、それが撲破せるなら壞して御覽なさいナ。」

トキツバリと云つて、

艶子「妾の國では義の爲めに戦争をして居るのですよ、貴郎の國の様な道に缺けた、畜生同様な人間は、憚りですが、一人だつて居りはしませんからね、

夫に何です貴郎方は、人を女だと侮つて、先刻から失禮な事はかり、御氣の毒ですけれど日本の女は、貴郎位に惚きはしませんからね。」

トさんざ嘲弄する、露兵ます〜躍氣と成り、今度は銃の臺尻にて扉を叩き始め、種々密談し、ト、露兵一人切窓より銃口を出し二三發續け様に發砲する。

艶子「何をなさるんです。」

ト云つて、又も柴折戸に寄り添ひ、待ち遠し想

に、

艶子「阿父さんは何うなすつたのだらうね。」

ト云つて、更に大きな聲にて、

艶子「阿父さん。」

ト長く聲を曳いて呼ぶ、此時遙かに奥の方にて

「オーイ」と云ふ呼聲を利かせ、續いて向揚幕より父藤兵衛を先きに、村役人村越銀造（四十五六、陣羽織野袴にて脇差二本差す）續いて村の者大勢各自に槍、鐵砲、棍棒を持ち、規律正しく出で来る、遅れて吉藏向ふ鉢巻に刀を提げ、平八天秤棒を振り〜、大威張りにて駆け付ける、村越大勢に向ひ、

村越「止め——オイッ！
と奇なる聲にて號令をかけ、さて艶子に向ひ、
村越「艶子さん、露助は何うしたですか。』
艶子「ハイ、彼の土室に入れて御座います。』
ト答へて村越を土間の中に誘入れる、村越わく
くしながら、
村越「だ、大丈夫ですか。』

艶子「大丈夫で御座いますとも。』
父藤兵衛村越に向ひ、
藤兵衛「何う致しませう、殺して仕舞ひますかな。』
村越「左様ですな、殺すとした處で、何うも彼の中に
居るのでは、……、然し構はんです、今から
大勢して、突貫と出掛けませう。』

艶子聞いて、
艶子「ア、何で御座いますね貴郎方は、敵兵だつて同
じ人間ぢや御座いませんか、夫に慍う申しては、
實に學者振る様で御座いますけれど、よく窮鳥懷
ろに入ればとか申すでは御座いませんか、あれを
むざ／＼殺して仕舞へば、それこそ不仁情此上無
しですし、又た彼人達も、もとはと云ひば國の爲

めに働いて居るので、武士は相見互とやら
……突貫なぞと那麽手荒な事をせずとも何とか御
工風を爲すつたら如何で御座いますか。』
村越「何とか工風と云つて、何うすれば好いのです
か。』
艶子「何うするつて、兎も角降参さした方が宜しいぢ
や御座いませんか。』
吉藏「これを聞いて、
吉藏「何ですつて？ 降参させるツ、笑談ぢやあり
ませんや、彼畜生奴等、戦争前から始終此島に來
やがつて、無暗と亂暴しやがるんですから、糞い
ま／＼しい、土室に居るを幸に、燒殺して仕舞つ
た方が。』
艶子聞いて、
艶子「何ですな吉藏さん、彼の人達を燒き殺せば、妾
達の住む家が、無くなつて仕舞ふぢや御座いませ
んか。』
ト云はれて吉藏、
吉藏「遠へ無え大縮尻だ。』
ト頭を掻く、大勢も可笑しくなつてドツと笑ふ、
村越

村越「では兎も角私か降参さして見ませう。」

ト云つてツカ／＼と土室の前に行き、

村越「露西亞の隊長。」

ト呼ぶ、露兵應答無し、村越更に、

村越「オイ、隊長は何うした。」

ト云つて、脚差を抜き、土室の扉を叩く、露兵矢張り應答無し、大勢俄かに騒ぎ立ち、

大勢「土でも堀つて逃げや爲ねえか。」

など、噂する、村越餘義無く大勢の内より二三

人の若者を呼び、

村越「貴様達、あの切窓を覗いて見ろ。」

ト命する、若者怖はく／＼ながら、切窓の邊りに

行き、可笑しき身振りに、ビョイ／＼と跳ね上

り、中の様子を窺ふ、露兵前の如く静かにして居

る、若者不審の体にて、村越の前に屹立し、

若者「何うも露助は逃げた様です」

艶子笑ひながら、

艶子「那麼ことがあるのですか」

ト云ふ、村越、少しく憤然として

村越「でも現在音もせん處を見ると」

艶子「何んで御座いますね貴郎方は、彼れ位降参させ

る事が出来ないなんて、餘り夫れぢやあ智恵が無
さ過ぎるぢや御座いませんか、まあ其のする事を
見て居らして下さい」

ト云つて、柴折戸の傍らより、竹梯子を持ち來

り、屋根にかけて雨樋を外じ來り、大勢に向ひ

艶子「貴郎方は水を汲むで下さいまし」

ト云つて雨樋を土室の切窓に差し込み、唧筒の

ゴム管を雨樋の穴に通す、村越始め父藤兵衛、

其他大勢不審の体、聽て村越艶子に向ひ

村越「艶子さん、全体こりやあ何うしたのです」

艶子「ハイ、水責めにして降参させますので御座いま

す」

村越始めて心付き、

村越「成程、これは名案ぢや」

ト感服の思ひ入れにて大勢に向ひ

村越「水汲め——オイッ」

ト命令する、艶子も續いて

艶子「さあ何卒お早く願ひます」

ト云ふ、大勢「萬歳」と叫びながら、轉挺舞し

て唧筒にて水を汲み、ドシ／＼土室に流し込む

村越嬉し氣に、彼方此方を迂路／＼し、ト、扉

に耳を押付け、中の様子を窺ふ、土室の中には
ビシヤ／＼と水の音、續いて露兵の咄聲、遂に
露兵悲し氣なる聲にて、

露兵「日本隊長、咄すことある」

村越聲に應じて

村越「何うちや、降参するか」

鮎子續いて扉の前に行き

鮎子「何うです、冷いでせう、體中が凍いは致しませ

んか」

ト云ふ、露兵泣き聲にて

露兵「私達降参するあります」

村越「何にッ、降参するッ？夫では武器を渡せ」

ト云ふ、露兵切り窓より銃一挺投げ出し、續い

て二挺三挺と投げ出す、大勢揃はずドシ／＼水

を流し込む、鮎子銃の数を數へて

鮎子「未だ一挺足りませんよ」

ト怒鳴る、又一挺投げ出し、

露兵甲「もうこれぎりあります、早くして下さい」

露兵乙「私溺れるあります」

露兵丙「早く、私凍るあります」

鮎子聞いて

鮎子「もう大概宜しいちや御座いせんか」
村越續いて大勢に向ひ

村越「水汲み止めッ！」

大勢ビタリと止める、鮎子扉を開けにかゝる、
大勢武器を扉に向け、いざと云はゞ露兵を打ち
殺す用意、鮎子扉を開けると、露兵ズブ濡れと
なりて出で来り、何れも胴震ひしながら、大勢
の前に畏まる、村越、藤兵衛、吉藏、平八、其
他露兵を縛し、恙無く捕虜とする、懸て村越大
威張りにて露兵の前に立ち

村越「立てッ！」

ト云ふを木の頭、鮎子始め大勢日本帝國萬歳と
叫び、賑かなる樂隊鳴物にて目出度く暮。(終)



明治三十八年八月一日印刷
明治三十八年八月四日發行

定價金八錢

發行所

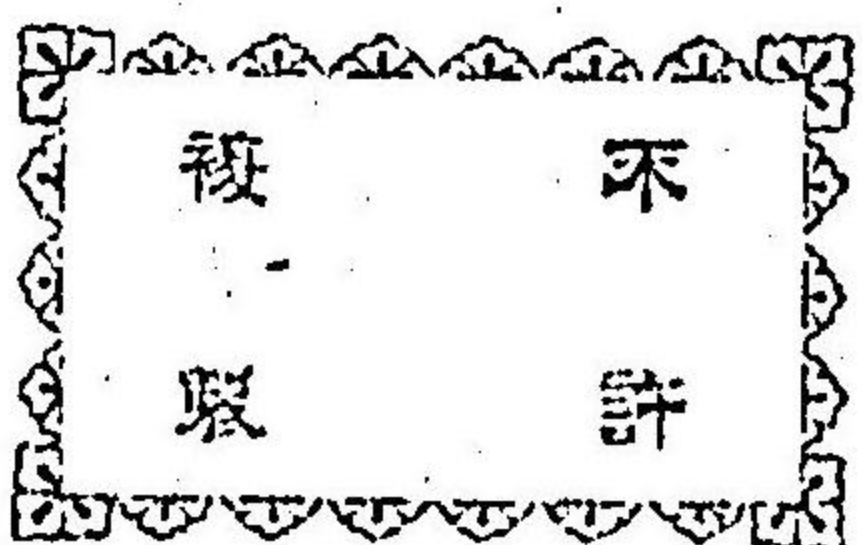
石倉重繼

東京市本郷區根津宮永町
二十八番地

印刷者

飯田三千太郎

東京市牛込區市谷加賀町
一丁目十二番地



印刷所

株式會社秀英舎第一工場

東京市牛込區市谷加賀町
一丁目十二番地

發兌元

東京市本郷區
根津宮永町

關勝閣

